

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

創世記 3 : 8

神の言葉に不従順したことによる変化が、アダムとエバに現れました。

#### 「そよ風のふくころ」

夜がないエデンの園では、周期的に変わる気温によって時間を知ることができます。そよ風が吹くころとはもう休む時間、地上でいえば「夕方」です。

#### 「園を歩き回られる神である主」

父なる神様が闇の領域が存在する第 2 の天にあるエデンの園に直接降りて来られ、そこを歩き回られたという意味ではなく、アダムとエバは、父なる神様から分かれた霊として、エデンの園に来られた神の声を聞くことができました。

#### 「御顔を避けて」

神の命令を破って、不従順の罪を犯したことを自覚した彼らの心に霊的な闇が入り、心配と恐れがやってきました。それで、神である主の声が聞こえてくると、御顔を避けて身を隠しました。

神を信じる人は、み言葉に従わず、敵である悪魔・サタンに操られて従い行っていく程、霊的な闇が心に宿り、光である神の御前を避けるしかありません。反対に、光である神のことばどおり生きている人は、神の御前に大胆に出、いつも神の御顔を仰ぎ見ることを慕い求めます。

悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

ヨハネ福音書 3 章 20-21 節

主とその御力を尋ね求めよ。絶えず御顔を慕い求めよ。

詩編 105 : 4



神様は私たちが犯すどんな小さな不義、過ちもすべてご存じですので、全知全能なる神様の前に心を明け渡し、神様と共に歩む者になりますように



神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」

創世記 3 : 9-11

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

ローマ人への手紙 8 : 6

### アダムに悔い改める機会を与えられる神様

創造主である神様は、被造物であるアダムを先に捜されました。神は、アダムとエバが善悪の知識の木の実を取って食べそれで身を隠したことも、すべてのことを知っておられましたが、アダムに直接確認しアダムが自ら告白することを願われました。神はアダムに悔い改め、立ち返る機会を与えようとされたのです。

### 罪を犯したアダムの心

アダムが木の実を食べるまえは、神が自分を呼ばれるなら「愛なる父、すばらしい方」という感じとともに御霊による思いだけが浮かびました。しかし、今慈しみ深い父として、憐みをもって来られた神様の前に、「恐ろしい神」という感じとともに「隠れなければならない」という気がしました。罪を犯した人は肉の思いが先んじ、不安と焦燥、恐れを伴い、他の罪を生んでゆきます。この「肉の思い」の鎖を断ち切り、「御霊による思い」に変えていかなければなりません。

### 「肉の思いの鎖」を断ち切る方法

「肉の思い」とは、真理に逆らう知識が感じとともに入力されて、たましいの働きによって再生されたものです。「肉の思い」を断ち切る為にはその「肉の思い」が初めて浮かんだ時の感じを変えなければなりません。

小さな子供が悪さをした時、親の顔を探して素直に謝ると、親は感動して許します。神様も霊の愛と赦しで抱かれます。 私たちも自分に施してくださった父の愛を覚えて、何としてもその愛にすがっていかねばならないでしょう。



神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」

創世記 3 : 9-11

愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。

第一ヨハネ 4:18

### アダムの場合

アダムは自分が罪を犯したことを認識すると、「神様は恐ろしい」という感じがしました。それで、神が捜されたとき、「隠れなければならない。」と、エバと一緒に身を隠しました。もし、この時アダムが「神様は恐ろしい」という感じを振り捨てたなら、自分を捜しておられる神の声を聞いて「愛のお父様だ」と感じたなら、怖くて隠れるのではなく、心苦しくて申し訳なくても、父の御前に行くことができたでしょう。しかし、相対性を経験したことのないアダムは、父の愛を心から感じるができなかったのです。人間耕作を受けている私たちは、罪を犯したアダムを捜しに来られた父の愛が心に刻まれていなければなりません。

### 主の十字架—「肉の思い」の鎖を断ち切る原動力

父なる神様は私たちが受けるべきだった死の刑罰を、ひとり子イエス様に負わせられました。イエス・キリストの十字架の苦しみと切なる愛が心深く迫る時、「肉の思いの鎖」を断ち切ることが出来、御言葉どおり生きる原動力となります。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

エレミヤ書 29 : 11



アダムとエバは神様との約束を破った罪により、思わず神様から身を隠しました。神様の教えを心に刻んでいなかった為に、神様の前に、隠れるしかなかったのです。私たちもイエス・キリストの犠牲の愛の中に留まっているのか、肉の鎖を断ち切っているのかと願ってみていきましょう。

